様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　４日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22530865

研究課題名（和文）
「小学校英語活動のカリキュラムマネジメントによる学校改善に関する研究」

研究課題名（英文）
A Study of School Improvement through Curriculum Management of Teaching English in Elementary schools

研究代表者
倉本　哲男（Tetsuo Kuramoto）
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：30404114

研究成果の概要（和文）：
「小学校英語活動」のカリキュラム開発原理は、英語（教科）教育学、及び教育方法学の学問領域で論じられるが、カリキュラムマネジメント論まで踏まえた「学校力とカリキュラム」の観点から論じられることは極めて少ないと概括できよう。本研究は、小学校において、「英語活動カリキュラムを如何に開発・経営していくのか、それがどのような学校改善効果を持ち、子どもにどのような学習効果をもたらすのか」を命題に研究主任を対象に量的・質的に実証した。

研究成果の概要（英文）：
The disciplines of English teaching Curriculum Development in the elementary schools are discussed within the subject of teaching pedagogy. However, it is seldom analyzed through Curriculum Management from the point of school management. In the realty of School management, it is important to consider both factors, Curriculum/Instruction and management issues. This research looked into the educational effectiveness of teaching English in elementary school by qualitative and quantitative methodologies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000 円	300,000 円	1,300,000 円
2011 年度	600,000 円	180,000 円	780,000 円
2012 年度	500,000 円	150,000 円	650,000 円
年度			
年度			
総　計	2,100,000 円	630,000 円	2,730,000 円

研究分野：教育学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：カリキュラムマネジメント・レッスンスタディー・小学校英語

１．研究開始当初の背景

本科研費申請研究「小学校英語活動のカリキュラムマネジメントによる学校改善に関する研究」（以下、本研究）の源流は、代表者は博士論文（教育学）「アメリカのカリキュラムマネジメントの研究　－Service-Learning の視点から－」を平成 20

年度に出版した。よって本研究は、以上の成果と課題(研究的残余部分)を踏まえ、総合的学習/Service-Learning 等の体験学習カリキュラムから「小学校英語活動」へと研究内容・対象は移行するが、研究分担者 Kuramoto が加わり、英語教育のカリキュラム開発論を研究方法フレームワークへ援用可能となる。換言すれば、「学校目標を具現化するカリキュラムを創り、学校組織で動かしていく」カリキュラムマネジメント研究において、小学校英語活動に特化した学校改善論を再構築するものと言えよう。

２．研究の目的

小学校段階から公的カリキュラムとして英語活動が導入され、既に各学校レベルで豊富な実践的蓄積がある。しかし、「小学校英語活動」は興味関心を重視する余り、子どもは喜んで楽しく活動してはいるものの、結局は「活動あって学びなし」と指摘され始めている。

また、「小学校英語活動」のカリキュラム開発原理は、英語（教科）教育学、及び教育方法学の学問領域で論じられるが、マネジメント論まで踏まえた「学校力とカリキュラム」の観点から論じられることは極めて少ないと概括できよう。よって、「小学校英語活動」を教育経営学の範疇でも理論的パラダイム転換を図り、カリキュラムマネジメント・学校改善論として再構築する必要がある。

３．研究の方法

まず、予備調査は以下の通りである。

① 調査目的

小学校英語活動の実態を、●学校文化の状況、●改善に向けた主任層のリーダーシップの状況、●小中連携に関する教師の意識について明らかにし、英語活動との関連を探る。

なお、調査対象は小中連携・一貫に何ならのかたちでかかわる教諭とした。

② 方法

質問紙法

（佐賀県の佐賀市・嬉野市・神埼市・小城市・多久市教育委員会に配布依頼。但し、回答に同意する学校のみ。）

回収件数７２７件（約１２００配布）

③ 期間

2009 年１２月～2010 年１月

④ 分析

SPSS Statistics version 17 による因子分析と相関係数

Word Miner1.1 によるテキストマイニングによる分析。

次に、予備調査に続く、本調査の方法上の質的な特色としては、以下の３点が挙げられる。

A) 研究課題を文献研究で歴史的に吟味した点。

B) 教育方法学と教育経営学を相互補完的に考察した点。

C) 実証方法として、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を用い、実証的にも研究を行った点。

具体的には以下のようなケーススタディーを実施した。

・学習過程論における実践分析
・学校要覧/指導案検討
・授業場面での授業記録分析
・学校長/カリキュラムコーディネーターインタビュー調査

４．研究成果

本研究の目的は、学校改善に向けたカリキュラムリーダーのカリキュラム開発とそのリーダーシップに着目した、内発的学校変革の要因（促進要因・阻害要因）を明らかにし、効果的な学校改善を探ることである。

そこで、以下のような研究課題を設定した。

① 「英語活動」と「校内研修」の形態を方法学と教育経営学の視点を整理し、相互補完的に扱うことで、小学校の英語活動を推進できる校内研修の仕組みについて考察する。

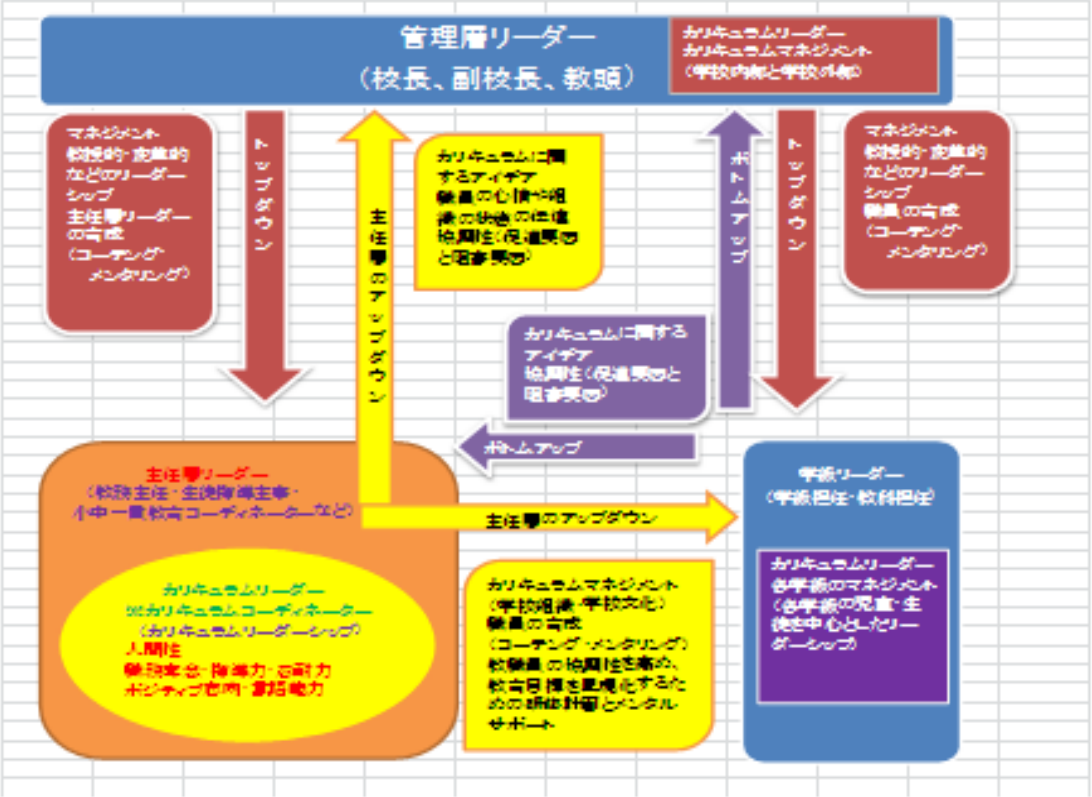
② 英語活動の校内研修のなかでも、研究主任に特化し、英語活動における研究主任の経営機能について明らかにする。

③ 管理層リーダーである校長のリーダーシップ・アプローチの展開と課題を整理し、主任層のカリキュラムリーダーシップ・アプローチが学校組織内部の「内部的協働性」について学校文化論の視点から検証する。

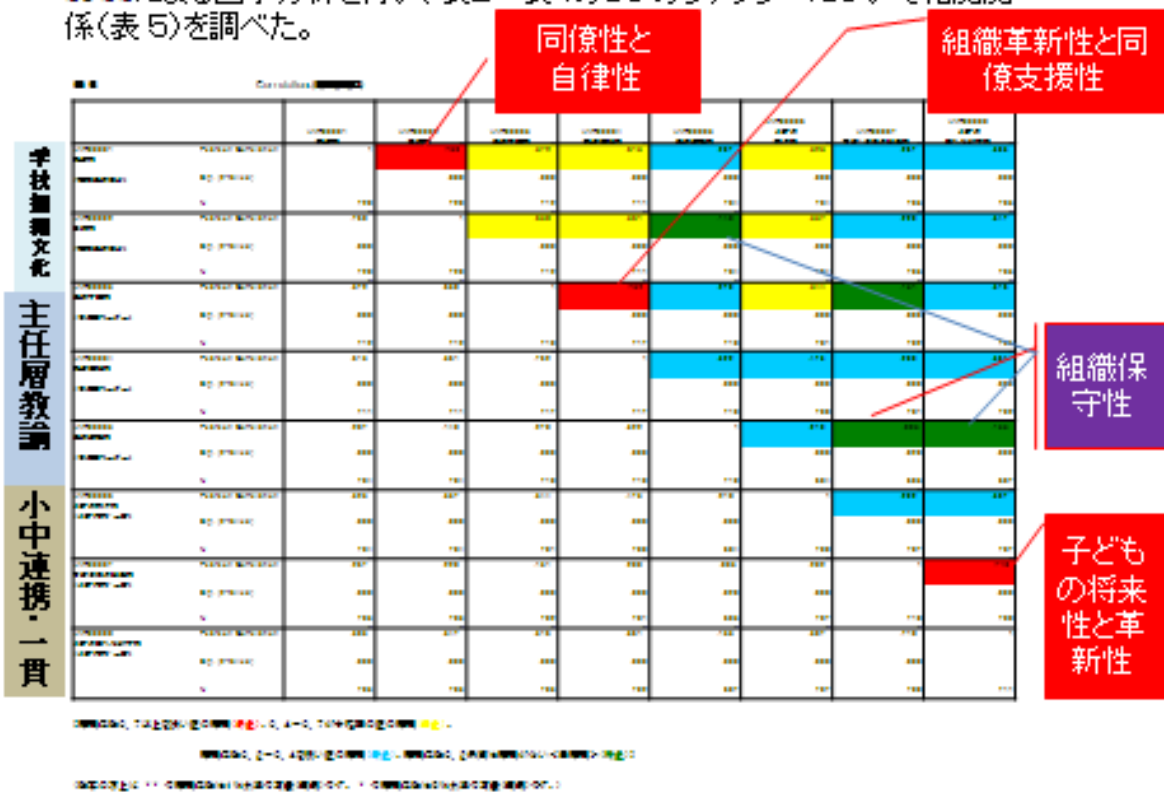
④ 小中連携・一貫教育のカリキュラム開発において、たとえば、小学校「外国語活動」などでは、中学校職員と小学校職員が協働することで教育目標を具現化することができる、とすると、その促進要因と阻害要因が何であるのかを明らかにする。

⑤ 校長のリーダーシップの影響プロセスを整理し、主任層であるカリキュラムリーダーの影響プロセスを検証する。例えば、小中連携・一貫教育コーディネーターのカリキュラムリーダーシップの効果が学校組織文化や教職員のモチベーションに対する効力感があるかどうかを検証する。

カリキュラムリーダーシップの構造図



SPSSによる因子分析を行い、表2～表4の8つのファクターについて相関関係（表5）を調べた。



上述の理論枠に鑑み、予備調査の結果を反映しながら、本調査（Case Study）では主として2つの方法論を紹介する。

(1) Grounded Theory Approach によるインタビュー分析。その結果は以下の通り。

1.校内研修について	a.自校の校内研修の概要
	b.情報共有やスキルアップの機会
	c.教職員の意識の変化
2.研究主任について	a.選定基準や選定の過程
	b.教職員への働きかけ
	c.研究主任自身のスキルアップの機会
	d.やりがいやうれしかったことについて
	e.困ったことや悩みについて
3.英語活動について	a.自校の英語活動の概要
	b.カリキュラム作成の際に、参考にした資料、協力者等
	c.授業で心がけていること
	d.児童の様子
4.学校文化について	a.教職員間の支援的雰囲気
	b.チームワーク
	c.教員間の個性の尊重
	d.授業改善や力量向上への積極性
	e.教員間のポジティブな相互刺激

メイン・カテゴリー	下位カテゴリー	A	B	C	D	E
1. 校内研修について	a.		○	○	○	○
	b.	○	○	○	○	○
	c.			○	○	○
2. 研究主任について	a.	○	○	○	○	○ ☆1
	b		○	○	○	○
	c.	○			○	○
	d.		○	○	○	○
	e.		△ ☆2	○	○	○
3. 英語活動について	a.			○	○	○
	b,	○	○	○	○	○
	c.		○	○	○	○
	d.		○	○	○	○
4. 学校文化について	a.,		○	○		○
	b,		○	○	○	○
	c.		○	○	○	○
	d.		○	○	○	○
	e.		○	○	○	○

1. 校内研修について
・校内研修を通し、英語活動の授業イメージが持てるようになるようである。
・教員の英語活動に対する不安や抵抗感の軽減

2. 研究主任について
・研究主任の資質のひとつとして、英語の運用能力は一切関係ない。
・研究に携わる教職員に日頃から積極的にコミュニケーションを図ることが重要。
・同僚からの達成感に満ちた声や苦労しながらも教職員全員で英語活動に取り組んでいる姿にやりがいや喜びを感じている。

3. 英語活動について
・学年ごとに活動のレベルは異なるが、基本的には共通のトピックを取り扱う。
・教材・教具の確保が重要
・中学進学時、ALT と接することへの抵抗感の軽減

4. 学校文化について（一部抜粋）

・学校全体で取り組む環境
・教職員が英語活動に真正面から取り組むように働きかけることが、日頃の授業や校内研修においてポジティブな相互刺激につながる。

よって本調査では、以下のように考察できる。
　第一に、小学校の英語活動を推進できる校内研修の仕組みで重要なことは、「小学校英語活動は、教科横断的な目標設定が可能であり、そのねらいは、言語習得ではなく、コミュニケーション能力の育成であること。」を、全教職員が理解し、ともに英語活動に関する知識や授業経験を積んでいく必要がある。

第二に、英語活動における研究主任の経営機能としては、「研究主任の選定には、他教科や領域とは異なり、英語に関する知識や技能に左右されない。」が抽出された。
　その背景には、他教科同様、校内研修を企画、運営していく能力が求められるが、それ以上に、英語を苦手とする教員への配慮が欠かせないことによる。

●Grounded Theory Approach によるインタビュー分析の考察
・カリキュラムマネジメント論（その中でも、校内研修及び研究主任に特化）と英語活動という、教育経営学と教育方法学の交差的領域を考察した。その実証として、一断面ではあるが、英語活動の研究主任の経営機能を、GTA・質的分析を用い、実証を試みた。その結果、英語活動の授業を通し、子どものコミュニケーションへの積極性が向上され、学級経営にも良い影響を与え、子どもの成長につながるプロセスを見出した。

　課題としては、小学校英語活動に関するカリキュラムマネジメント論をすべて実証できたわけではない点（質的研究のサンプル数が少ない点）に本研究の限界性がある。

(2) 研究主任の年間の実践（Case　Study）
校内研修のたびに、第一人称（研究主任）第二人称（教務主任）第三人称（倉本）による間主観による考察を行った。

４月以降の実践をナラティブレポート

	【５月２６日第１回研修】	【６月９日第２回研修】	【８月２日先進校視察】	【８月９日第３回研修】	【８月２４日第４回研修】
実践者	中学校の組織文化のネガティブ性改善と小中連携・一貫教育のカリキュラム開発を勧めるために「子どもの貧困」と題したプリントを第１回目の研修前に全職員に渡して、モチベーションが高まるように仕組んだ。 （第３人称）倉本先生 小中学校の組織文化のネガティブ性を感じられた。	第２回目の研修では、前回の教育課題を明確にするため、学習部と生徒指導部に分かれてグループ会議を行った。少し語が進んできている感じがした。	福岡の先進校視察を全職員で夏休みに実施した。これからの芦刈校のモデルになるものと考えてである。	否定派は、新築の校舎や多くの教師で練り上げたカリキュラムをうらやましく思うだけで、それを自分の芦刈校の参考にしようという考えではなく、だからできないという理由付けにしていた。第３回目の研修では、モチベーションを上げるために、小中の先生方が協働することが何より必要であることを訴えた。	今回は、モチベーションの下がった職員に協働の大切さを訴えたかった。今回は、メソッドのまとめと道徳及び生徒指導でグループ別会議を予定した。しかし、これもなかなか進行しなかった。ただ、内容が深まっていた。誰もが自分のこととして考え始めたように感じる瞬間がそこにはあった。
肯定派	子どもの将来のことを考えれば、小中連携の取り組みも必要であろう、という気持ちが表情から伝わってきた。	前回のKJ法や今回のグループ会議で学校のミッションが見えてきているようであった。	施設が新築で部屋数や設備が充実していることは、それとして、今の芦刈校で必要なものを取捨選択している姿に感動さえ覚えた。	今回は、初めて前期・中期・後期と3ブロックで話し合いを行った。前回タキ台もない、という批判に対して学習メソッドの原案を基に話し合ってもらった。話す中で特に中期ブロック（小中の先生方が話し合うグループ）が白熱していた。とても良いことだと感じた。	前回の福岡研修の後、実は懇親会であった。その際、少人数で話し合いをしましょう、と私の会議の少ないことで悩んでいることと小中一貫教育に関して考えていることを話し合うことができた。
否定派	会議後に、教育目標とか今更という声が聞こえてくる。何も進まないし小学校の先生方と連携をしようという気持ちが少ない。それを職員室で大きな声で発言する教師がいることが残念である。 （第２人称）小学校の坂本先生が、これまでの研修が進んでいないことを実感していたが、話し合いの時間の確保ができていない不満も持っていた。	グループ会議が入ったことで、小中の先生方の話し合いが初めてできた気がした。しかし、これまでの前年度までの話し合いが合同ばかりで、少数での話し合いがなかったことが、より職員の和を懐疑的にしたようでもあり、まだ不信感が感じられた。 （２人称）小学校の中武先生から以前決めていた共通実践を中学校ができていない、と批判があった。	視察後に、やっぱりハード面ができないと小中一貫はだめよね、とか、市全体でバックアップしてもらってるから良い、だから芦刈はできない。そういう声が聞こえてきた。 （２人称）坂本先生は、昨年度から否定的な発言が多く、小学校の先生方もうんざりしている、という話であった。会議に前向きさが感じられない、ということであった。	学習メソッドで意見が割れた、意見が出し合えることは良いことだが、小さなことにこだわりすぎていた。小学校のコーディネーターが答えたが、それでも納得していなかったので、指導案を作成するときは起承転結があるはずと、言い切り会を進めた。話し合う時間は無性に過ぎていく。	否定派の若手教諭が、会議後、小学校の先生から止められ、次の合同行事である「クリーン作戦」を話し合っていた。その後、他の教師から、もっと少数で話し合いを深めた方がいいよね、と前向きな意見をもらうことができた。少し氷山の一角が溶け始めている感じがした。 （２人称）坂本先生も今回の会議で全体的に前向きな教職員の姿勢が感じられた、ということであった。

●ナラティブ分析による考察

研究主任の取り組みから校長と主任層教諭のリーダーシップの類似点と違いが推察することができた。校長には、職員に対して管理職としてのエンパワーメントがある。また、そのエンパワーメントを活用して教職員に学習面や生徒指導面などに関して、「教育的リーダーシップ・変革的リーダーシップ」などのリーダーシップを発揮することができる。

つまり、校長の考え方次第で学校を改善することもできるし、もしくは積極的な行為がなく、保守的なリーダーシップであれば、教職員の組織文化によっては学校改善の傾向になるかもしれない。あるいは、あまり変化のない学校になることも考えられる。またその一方では、学校の改善とはほど遠いものになる可能性も指摘できる。

それに対して、主任層教諭のリーダーシップは、校長のようなエンパワーメントが、あるとはいえないであろう。エンパワーメントがあまりない中でリーダーシップを発揮するためには、経験知を含む豊富な知識と行動力や人間性といったものが、職員に認められることが大前提となる。

すなわち、校長以上に職員との触れ合いも多く取り、コミュニケーションを深めることが必要であり、校長が持っているエンパワーメント以上に難しいものと言える。

また、管理職や職員との人間関係において、組織風土を創り出すことにも重要な働きをする地位であるため、「コーチング・メンタリング」というような手法がとても重要となってくる。

(3) 総合考察

主任層教諭のカリキュラムリーダーの要素として、大きく４つの項目を考えた。①カリキュラム開発能力（教育的専門性）、②コミュニケーション能力（組織文化促進性、③状況対応能力（組織協働性）、④ポジティブ志向能力（組織革新性）である。本研究は、主任層教諭に必要な資質として、実践者の行為に関する考察の中で具体的な資質を提示することができたと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

1.Nguyen Huyen Trang, & Tetsuo Kuramoto(2013) :A study on "PROJECT MANAGEMENT" A case study on schools integration by board of education, World Association for the Lesson Study.
（査読有り）

2.Tetsuo Kuramoto "Summary of "Lesson Study" and "Curriculum Management" in Japan"(2012)
The Journal of The Faculty of Culture and Education VOL.17, NO.2 pp.129-154.
（査読なし）

3.Tetsuo Kuramoto & Christine Kuramoto,: "An Action Research of Lesson Study in Japan—From the Point of View of Student's Achievement and Teacher's Professional Development—(2011)"
he Journal of The Faculty of Culture and EducationVOL.17, NO.1pp..133-147.
（査読なし）

4.Tetsuo Kuramoto: An action research study of Curriculum Leadership in Japan(2011) The Journal of The Faculty of Culture and Education VOL.17, NO.1 pp..119-132.
（査読なし）

〔学会発表〕（計３件）

1.Tetsuo Kuramoto: (An action research study of Curriculum Leadership in Japan The International Association for the Advancement of Curriculum Studies (IAACS)Rio de Janeiro /Brazil
2012 July 2nd

2.Tetsuo Kuramoto: Lesson Study and Curriculum Management Symposium 5: The World Association for the Lesson Studies (WALS) Tokyo 2011 November 25th

3.Tetsuo, Kuramoto & Christine Kuramoto "A Study of Service-Learning in Nicaragua -From the point of view of Medical English Education- 2010 July 5th

６．研究組織
(1)研究代表者
倉本　哲男（Tetsuo Kuramoto）
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：30404114

(2)研究分担者
Christine Kuramoto
九州大学・医学研究科・講師
研究者番号：20510126